

10 番 打 者

角川小説新書

10 番 打 者



昭和三十七年七月十日 初版発行

定価貳百参拾円

著 者 佐 野 洋

発行者 角 川 源 義

印刷者 中 内 あ き 子

東京都千代田区飯田町一ノ二三

発行所 株式会社 角 川 書 店

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座東京一九五二〇八番
電話九段 〇一一一（代表）一五

（落丁・乱丁本はお取替えいたします）

Printed in Japan

中光印刷・本間製本

10 番 打 者

佐 野 洋



角川小説新書

目次

序章 彼との出会い

七

第一話 不均衡計画

七

第二話 ウイニング・ボール

九

第三話 盗まれたサイン

二六

10 番打者

180

序 章 彼との出会い

残念ながら、彼の本名を明かすことはできない。私は、彼こそ、日本プロ野球の陰の功労者であり、野球体育博物館に肖像を飾られてもよい人だと信じているのだが、実名を出すことを、彼が好まないのだ。

今回、この記録を公開するについても、再三、再四説得して、やっと許可を得たしまつである。その際、彼からは、絶対に本名は出さないこと、また、読者に彼の正体を見破られるような表現をとらないこと、という条件をつけられてしまった。

そのため、私はこの手記においては、彼を『桜』と呼ぶことにする。もちろん、仮名である。

だが、この仮名には、理由がないわけではない。彼は自分の配下にある調査員、研究員などを総称して、『桜機関』と名づけていたのだから……。

桜機関のこれまでにやった事業は、数多い。その一々を上げれば、あるいは、戦後の日本史は、書き換えられなければならないだろう。だが、これらの活動は、すべて、舞台の裏の裏で行なわれているため、この機関の存在をさえ、人は知っていないはずだ。

しかし、もし、例えば戦後の有名汚職事件の発覚の端緒を、系統的に調べてみた人がいれば、必ず、桜機関にぶつかったはずだ。大選挙違反について、警察や検察庁に、秘かに情報を暗示したのも、この桜機関なのである。これらは、いずれそのうち、機関員の担当者が記録に残すことであらう。

私は、桜機関の数多い事業のうち、プロ野球に関係した部分だけを、ここに書き記していこう。

ただ、二年前、桜機関の事務所が火災に遇い、書類の一部を焼失してしまった。そのため、この記録でも、あの部分は、私の貧弱な記憶に頼らなければならなかった。あるいは、記憶違いのために、現存の方にご迷惑をかけるような事態がないとも限らない。あらかじめお断りして、ご寛如を乞いたい。

1

桜は……、いや、いきなりこう書くよりも、私と桜との出会いから述べてみよう。その方が、彼の人物像を浮き上らせ易いから。

昭和二十三年八月、私の勤めていた出版社は潰れてしまった。インフレの波に押され、従業員の給料が払いきれなかったのだ。

翌日から、私は就職口を探して歩いたが、そう簡単に仕事が見つかるはずはなかった。この年は戦後のインフレが最高潮に達した年でもあった。そのため、官公労、民間企業とも、賃上げ闘争が波のように繰り返され、新規採用をするような会社はなかったのである。

試みに、この年の大きな労働争議を上げてみよう。それだけで、当時の社会状況を説明できると思うか

ら。

片山内閣が倒れ、芦田内閣が成立したのは三月十日だが、それより先の三月一日、全通大阪地協が二十四時間ストに入り、それをきっかけに、全通のストは全国に広がっている。三月闘争の口火である。全官労は賜暇休暇あるいは、一せいで職場放棄を行ない、民間労組がそれに続いた。電産は野放し送電の一手手前まで行ったし、炭労、全石炭のストは全国に波及した。

一方、それまで押され続けた経営者側が、巻き返しに出たのもこの年である。経団連が四月に日経連に改組し、その第一着手として、東宝砧^{きぬた}撮影所で二百七十名の解雇が行なわれた。この解雇をめぐる東宝争議では、労組が撮影所に立てこもり、ついに八月十九日の仮処分には、米軍戦車四台が出動するほどであった。

東芝、日立、富士電機など、現在では電化ブームに乗って、躍進を続けている大企業でさえ、企業整備案をめぐる闘争が展開されていた時期である。

私の就職口があるはずはなかった。私は真夏の暑い日盛りの下を、重い軍隊靴をひきずって、あちらこちらに、無駄足を運んでいた。

そうしたある日、私は焼け跡のビルに貼られた求人広告を認めた。

「調査員募集、当事務所、希望者は面談の上、採否を決定す」

そこには、法律事務所の看板がかかっていた。

弁護士の下請け調査か、と私は思った。余り芳^{かんば}しい仕事ではない。しかし、ぜいたくはいっていられた

かった。私はせまい階段を上がって行った。

しかし、内部は意外に広い。壁も塗り替えたらしく、当時としては、上の部に属する事務所であった。受付の女事務員も、ズボンではなく、派手なスカートをはいていた。

「ポスターを見てきたのですが……」

私は、女事務員の鮮やかな口紅にみとれながらいった。口紅をつけた女性を、米軍関係以外の場所で見るとは、珍しかった。

「あら、お気の毒ですわ。昨日で、締切ってしまっただけです」

もし、そのまま、引きさがったら、私が彼と会うこともなかったし、こうやって、この記録を書くこともできなかったわけだ。

私は、無駄とは知りながらも、何とか取次いでくれと頼んだのである。あるいは、ちゃんと女らしく化粧した女性と、少しでも長い間、話していたいという気持ちも働いていたようだ。

そこへ、彼が現われたのである。舶来地らしいダブルの背広を着た、中年の紳士だった。（その正確な年齢、容貌などを、ここに書くわけにはいかない。そのために、彼の正体が知られてしまうと困るのだ）

「何だね？」

彼は私に鋭い視線を走らせていった。胸に、衆議院議員のバッジをつけていた。

「実は、何とか、調査員にさせていただきたくて……」

「ふうん、前職は？」

「出版社に勤めていたのですが、そこが潰れてしまい」

「じゃあ、とにかく、こちらへきて見給え」

彼は先に立って、別室へ私を導いて行った。ざまを見ろというように、私は受付の女事務員を振り返った。しかし、彼女はそんな私を無視していた。

スプリングのあまり利いていないソファに、私と彼とは並んで腰をおろした。だが、そのようなソファも、当時は、なかなか目にすることができないものであった。

簡単に学歴、職歴、家族関係などを聞いたのち、彼はいった。

「君は、好奇心の強い男かね？」

「どちらかといえば、強い方です」

「では、ものごとすべて、とことんまで、突きつめないと気のすまない方か？」

「いいえ、それほどでも……」

私は多少あわてた。彼の質問の目的が、まだ十分にわからなかったからだ。

「もう一つ聞こう。好奇心が強くても弱くてもかまわんが、わしが立入ってはいかんと命令したことを、強いて探らないだけの良識は持っているだろうな？ それを、いま約束できるかな？」

「ええ、もし採用していただけたら、その命令にはそむきません」

「じゃあ、採用しよう。給料は……」

彼はいきなり、金額を述べた。その金額が私を驚かした。個人が、それだけの額を払ってくれるとは、

考えられないほどの額であった。

「うん？ 不満かね？」

私の表情を見て、彼は誤解したらしい。眉をひそめるようにして、聞き返した。

「いいえ、不満どころではありません。それほどの待遇は、現在、どこへ行っても……」

「そうかな？ じゃあ、本当に給料が払いされるか、どうか、多少は不安だろう？」

「は？ しかし……」

私は口ごもった。不安でないことはなかった。給料の遅配、欠配はほとんどの会社で常識となっていた。好条件を最初に切り出し、働かせた上に、月末になって、給料が遅配するのではかなわないという気もした。

「いや、不安なら不安といい給え」

「ええ、それは……」

「じゃあ、最初にこれを渡しておこう」

彼はそういうと、机の引出しから、百円札の束を出し、器用な手付きで数えると、それを渡してくれた。つまり、給料の前払いである。

私は目をみはった。

「さて、次の質問だ。君はいま、おそらく不思議に思っただろう。研究員、調査員は君だけではなく、何十人という。その全部に対して、わたしは、同じように給料の前払いをしているのだが、その金を、い

「いたい、どうやってわたしが得たか？ その点が疑問ではないかね？」

「はい。まさか……」

私は、『犯罪によって』という言葉中途でのみこんだ。

「そこなんだ、わたしのいうのは。つまりだな。わたしがこの事務所を運営している資金を、どこから得ているか、それについて、君は好奇心を抱いてはいかんだ。わかったかな？ もちろん、犯罪その他、不正手段によるものではない。その点は安心してよい。要するに、報酬あるいは寄付の形で、わたしの手にはいったものだ。そのことだけは氣にとめておいて構わない。しかし、だれから貰ったものか？ どんな事件の報酬か？ そういう疑問は、一切無用にしてほしい。いやこれは希望ではなく命令だ。わかったかな？」

「わかりました」

ごく素直に私は答えていた。彼の口調に押されたのである。そして、彼の眼は、人を服従させるだけの鋭さを持っていた。

2

私は、この事務所に採用された。毎日、ここに出勤して、彼の命令に従い、方々を飛回ったり書類の整理をしたりしていた。従業員の総数がどのくらいあるか、ここに書くわけにはいかない。しかし、読者諸氏が想像される数よりは、おそらく多いであろう。

彼の名刺には、いくつもの肩書が書かれてあった。衆議院議員、衆議院××常任委員会理事、〇〇党参与、弁護士、そして数社の非常勤取締役であった。

私は与えられた仕事は、確実にやり遂げていた。その種の仕事が、私に適していたのかもしれない。やがて、九月にはいった。

ある日、私は所長室に呼ばれて、彼から質問された。

「君は、プロ野球をどう思うかね？」

「どう思うとは、どんな意味でしょうか？」

「いや、こんど、君にプロ野球関係の仕事をして貰おうと思って……」

「プロ野球ですか？　どうも、気がすすみませんね」

私は率直にいった。

「なぜだね？」

「たしかに、野球はいま、一番人気のあるスポーツです。しかし、これはいわゆる進駐軍の三S政策によるものではないでしょうか？　政令二〇一号、東宝争議、総司令部による手紙の検閲などで、国民の間には、何となくアメリカ軍の民主主義もあやしいという、批判の眼が育っています。そういうとき、国民の関心を、セックス、スクリーン、スポーツといった、人生にとっての第二義的なものの方向に向けることによって……」

「ほう？　君は共産党か？」

(第24節 9. 14現在)

	試合	勝数	敗数	引分	勝率	勝差
南海	98	60	36	2	.625	—
巨人	97	56	40	1	.583	4
阪神	97	50	44	3	.532	5
阪急	95	47	46	2	.505	2.5
大陽	95	45	47	3	.489	1.5
金星	98	41	53	4	.436	5
中日	99	40	55	4	.421	1.5
急映	97	36	54	7	.400	1.5

「いや、共産党というわけではありませんが、いまの日本には、野球よりも、やらなければならないことが……」

「わかった。しかし、君は若いねえ。物事を単純に割り切れれば、苦労はないだろうが……」

彼は私の青くさい議論にも腹を立てなかった。むしろ、私を哀れむようにさえあった。

「そうでしょうか？ しかし……」

「しかしもくそもない」

彼は急に強くいった。

「とにかく、これは命令だ。それとも、命令に従うのはいやだというのかね？」

「いえ、そんなことはありません」

私は、あわてていい直した。九月分の給料も、すでに前払いで貰っていた。いま、ここをくびになつては、新しい職業につくことなど困難なのだ。

当時の日本には、『泣く子や地頭もマッকারサーには勝てぬ』という言葉があったが、私にとっては連合国総司令官のマッকারサー以上に、彼の方が恐しかった。